

目的を明確にした言語活動で 思考力、判断力、表現力を育む

各教科等での言語活動は既に取り組みられている一方で、その目的についてはあいまいなままであるという実態がありそつた。改めて、各教科等で言語活動を充実させる意義や授業づくりについて、文教大と共同研究を進めている埼玉県越谷市教育委員会の小林俊夫主査にポイントをうかがった。

各教科等における「言語活動の充実」の目的

- 言語活動の目的は、思考力、判断力、表現力等の育成。各教科等を充実させ、ねらいを達成するためのもの

「言語活動」の意義

- 一人ひとりが自分で考え、間違いを恐れずに意見を交わし、共に学び合える子どもが育つ
- 自分の経験や知識を基に考える子どもが育つ

授業づくりの考え方

- 各教科等のねらい、特性に即して言語活動を考える
- 思考力、判断力、表現力等を育てる言語活動を取り入れる

文教大教育学部

鳴島 甫 教授

なるしま・はじめ◎筑波大名誉教授。筑波大附属高等学校などを経て現職。専攻は国語表現学、国語教育学。著書に「俳句によるレトリック、原点からの指導」（大修館書店）、共著に「高等学校新学習指導要領の展開 国語科編」（明治図書出版）など。



越谷市教育委員会 教育総務部指導課
教育センター 教育研究担当

小林俊夫 主査

こばやし・としお◎埼玉県草加市立花栗中学校や同市立新栄中学校教諭、越谷市教育委員会教育総務部学校課教職員係主任指導主事、指導課教育研究担当主任指導主事などを経て現職。市内の多くの小・中学校を回り、授業力の向上に取り組む。

何のため？ 各教科での言語活動

各教科等における「言語活動の充実」の目的

すべての教科で求められる
思考力、判断力、表現力の育成

鳴島 各教科等で「言語活動の充実」がなぜ求められるのかを確認しておきましょう。

言語活動が重視されるに至った背景の一つが、2004年に文化審議会が出した「これからの時代に求められる国語力について」という答申です。この審議会には国語関係者だけでなく、数学者や脳科学者なども参加し、「国語力」は国語を中心としながら、各教科やその他の教育活動全体の中で身に付けるものであることが示されました。また、「読解力」(*1)に課題があるというPISA調査の結果を受けて、文部科学省でも、各教科や「総合的な学習の時間」など、学校の教育活動全体で読解力向上に取り組む方針を打ち出しています。

新学習指導要領の『総則』では、「思考力、判断力、表現力、その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」などを育むことが強調されています。その思考力、判断力、表現力等を育む観点から、各教科等の指導で言語活動の充実が求められているのです(図1)。「言語活動」とは、「話す」「聞く」など、「言語による活動」と捉えておくと良いでしょう。

この活動が、思考力、判断力、表現力等育成のための手段であり、そのためにすべての教科等で取り組むことが重視されているのです。新学習指導要領では国語を中心として言語活動を進めることが示されていますが、これは国語の「補填」という意味ではありません。あくまでも全教育活動を通じた言語活動の充実が求められています。

小林 国語以外の教科の言語活動がイメージしにくいのは、言語活動のテーマは「言葉だけ」と考えがちなことがあると思います。しかし実際には、音声や絵画、身体表現など、各教科の特性に合わせて言葉を使うシーンがあることを思い起こせば、他教科にも取り入れやすくなるのではないのでしょうか。

例えば、グループごとにリコーダーの曲をつくる音楽の授業で、一人が一小節ずつ考えてつなげていく活動を組めば、伝え合う力を育むと共に、音楽に創造的にかかわる力にもつながります。体育では、例えばハードルを跳び越えられない子どものために、クラスの子がアドバイスしたり、応援をすることも言語

活動です。言語活動とは、各教科等を充実させるためのもの、各教科等のねらいを達成するためのものであり、それぞれの特性を考えて取り入れることが大切なのです。

「言語活動」の意義

間違いを恐れずに
意見を交わし合える子どもが育つ

鳴島 言語活動を充実させることで育つ子どもの姿を具体的に考えてみましょう。今後の社会では、一人ひとりが自分で考え、「僕はこう考えた」などと、間違いを恐れずに意見を交わし、共に学び合える子どもの育成が求

図1 新学習指導要領 第1章 総則

第1 教育課程編成の一般方針・1からの抜粋

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項・2(1)からの抜粋

各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。

*下線部分は編集部加筆

*1 自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力(文部科学省「読解力向上プログラム」2005年12月より)

められています。しかし、これまでは、まだ先生方が「正解」を教える授業が多かったのではないのでしょうか。そういう授業を見直して、子どもが正解をつくり出していく学習にすることが求められていると思います。

小林 確かに、これまで「教室は間違えても良い場だ」と言いながら、子どもが間違いを恐れずに自分を表現するための場にはなっていませんでした。子どもが主体的に考え、表現をしていく場となる言語活動は、有効な手段となると思います。

鳴島 これからは、自分の知識や経験と結び付け、新たな問題を解決していく力も必要です。自らの経験は、すべて言葉を通じて認識されるものです。だからこそ、体験と言語を結び付けた言語活動が重要だと思います。

例を挙げましょう。国語の「音を表すことば」（擬音語）を学ぶ授業で、教科書を読むだけなら、「こんな言葉があるんだな」という理解だけで終わります。しかし、例えば、身の回りから音を表す言葉を探して発表し合うという言語活動を取り入れれば、「消防車のサイレンの音がそうだ」などと、学習と知識や経験が結び付きます。これにより思考が深まると共に、新しいことを学ぶ時に「自分の知識や経験を基に考えれば良い」と自信を持って考えられるようになっていくのです。活動の形にすることで、子どもが本気になって取り組み、力が付くという利点もあります。

図2 「言語活動の充実」のためのチェックシート



*文教大と越谷市教育委員会の共同研究資料を基に、編集部が作成

言語活動を取り入れる
授業づくりの考え方

思考力、判断力、表現力が
十分に育つ要素が含まれるか

小林 現在、文教大と越谷市教育委員会の共同研究（*2）により、言語活動の充実に向けた取り組みを進めています。最初は言語活動と聞いて、「新しい指導を取り入れなければ

ならない」と構える先生方がいましたが、これは誤解です。どの先生も、言語を用いて伝え合う、表現するなどの言語活動を、多かれ少なかれ授業に取り入れているのです。ただし、これまでは、すべての授業で何のための活動なのか意識されていたとは言い難いと思います。ですから、今、先生方をお願いしたいのは、各教科等のねらいや特性に応じて、言語活動のねらいや内容を改めて確認し、意識的に取り入れていくことです。

*2 研究テーマは、「『言語活動の充実』に関する教員研修 カリキュラムの開発・実施を通じた研修リーダーの育成」。理論と実践をつなぎ、教員の資質を高めるというねらいの下、08年度から行っている

何のため？ 各教科での言語活動

効果的な言語活動とするための ヒ・ソ・ト

ポイント① メリハリを大切に

算数などでは言語活動を取り入れようとするあまりに、基礎的・基本的な知識・技能の習得に重点を置く時間が足りなくなるケースもあるようです。毎回の授業に必ず言語活動を取り入れる必要はありません。時期によっては計算の練習に集中するなどして、授業にメリハリを付けると良いでしょう。(鳴島先生)

ポイント② モデルを提示する

話し合いや発表などの活動では、いかに子どもが意見を述べ合い、深め合うかがポイントになります。例えば、ある子どもの意見に賛成の時、「同じように考えたけど、この部分だけ違います」「意見を聞いて、新たにこんなことにも気づきました」などと、自分の言葉を補って話すことが学び合いになります。これには訓練が必要です。まずは教師が発表や賛成・反対の仕方を見せたり、出来そうな子どもがまず答えるようにしたりして、話し方のモデルを示せば、それをまねすることから始められるでしょう。(小林先生)

ポイント③ 実態を踏まえて活動の形態やテーマを考える

小学生の場合、いきなり4人グループの話し合いをさせても、なかなか意見がまとまりません。まずはペア活動から始めるなどして対話に慣れさせた上で、人数を増やしていくと良いでしょう。(小林先生)

答えが一つの問題をグループで考えさせるような言語活動は、塾で習った子どもがリードするなどして、全体での話し合いが深まらないことがよくあります。多様な考え方が出来るテーマを選ぶことが大切です。また、子どもが自分の考えを書いたワークシートなどをグループ内で読み合い、他の子どもが感想や意見などを書いていくのも意見交換が深まりやすい活動の一つです。(鳴島先生)

鳴島 言語活動を授業に取り入れる上で必ず考えてほしいのは、思考力、判断力、表現力が育つ活動になっているか、ということ。言語活動は目的を達成するための手段であり、その目的とは、授業のねらい、その教科

での思考力、判断力、表現力の育成なのです。

小林 よくあるのが、グループの話し合いを取り入れさえすれば言語活動になると考えて、話し合いをする目的を考えていないケースです。話し合いには、「一人ひとりの考えを広げる」「グループの意見としてまとめる」など、さまざまな方向性があります。付けたい力に照らし合わせて、そもそも話し合いが必要かどうかを考え、取り入れる場合には適

切な材料や話し合いの流れを提示するなど、目的の達成に向けた教師の導きが不可欠です。

鳴島 それと似たケースに、「インターネット」で調べたことを発表する」「スピーチの仕方を学ぶ」といった活動があります。これらは言語活動の前段階としては良いかもしれませんが、これだけで、すぐに言語活動となるわけではありません。

小林 力の育成につながる言語活動を取り入れた授業をつくるために、文教大との共同研究では鳴島先生の提唱の下、全教科の言語活動に共通して必要な要素を整理しました(図2)。まず、全教科で考えられる言語活動を洗い出し、「A 主な学習活動」として分類し

ました。その中で、「B 思考、判断等の主な活動」の要素が含まれることが見えてきたのです。更に、言語活動自体の目的も必要で、それが「C 明確な活動の目的」となります。このチェックシートは、指導案の作成時や作成後にこれらの要素が入っているかを確認するという使い方が出来ます。授業づくりの参考にしてみたらどうでしょうか。教師の大量退職を間近に控え、若い先生方への知の伝承を目的として作成しました。

鳴島 A、Bはそれぞれ、すべての要素を盛り込む必要はありません。それぞれの要素の一つか二つに絞った言語活動は、むしろねらいが明確であり、子どもが集中して取り組みやすくなると思います。

鳴島先生

小林先生

から

先生方へのメッセージ

自分の力で考える子どもを育てるには、先生方自身が考えることが何より大切です。一人ひとりの先生が、子どもに付けたい力とそのために必要な授業を十分に考えてください。言語活動には「こうすれば良い」というマニュアルはなく、最終的には子どもの実態に合わせる事が大切です。十分に考えさせる前に答えを与えていないかなど、目の前の子どもをしっかり見つめながら、言語活動の充実に取り組んでいただきたいと思います。